川ぴたり

むかしのことだがな。上境の一の沢を流れる唐沢川でのことだった。
秋の取り入れも終わり、やっと一段落した頃、
「大根も、白菜も良く育ったな。それによ、何よりも、今年は米が、今までになくいいできだったな」
「本当によかったね。これでいい正月を迎えることができんね」
おっとやんと、おっかやんは、土手に腰下ろして、のんびりと話していたもんだ。
そうしているうちに、十一月も末になった。すると、おっとやん、
「もうすぐ、川ぴたりの日が来るぞ。屑米洗って粉にしてうや」
おっかやんも、
「そうだね、どのくらいついたらよがんべ」
そんな会話が、あっちからも、こっちからも聞こえてくる。

いよいよ十二月一日になって、朝早く、どこの家からも、ペッタンコ、ペッタンコと餅つきの音が聞こえてきた。
餅つきが終わると、おっとやんが、近所中の子供らみんなに、
「ほうら、早く川に行くぞ。水の神様にお礼を言ってくんだぞ」
そう言いながら、二段重ねの餅を納屋にある箕の上へお供えしてな、
「水神様、今年の米は、いいできだったよ。ありがとうございました。これで、いい正月迎えることができますだ。来年もまたいっぱいの水をおめぐみくだされや」
と言って、御幣束で、
「祓いたまえ、清めたまえ」
とお祈りをしたもんだ。
川へ集められた子供らは、おっとやんに、
「それ、川の中へ入って、尻つけんだぞ」
そう言われて、いやいやながら、指の先だけつけて帰ろうとすると、おっとやんに、
「よぐ、尻洗って身を清めろ。そうしねえとな、水の神様がおごんだぞ。神様がおごったら、来年は水をもらえねぐなっちまうんだから。そうなったらな、田んぼも畑も干か

らびて、米も野菜もとれねえで、食い物がねぐなっちまうんだぞ。だから、川の神様、ありがとうございましたって、お礼言うんだぞ」
と、言いながら、おっとやんと、おっかやんは、仁王立ちで見ていたっけな。
子供らはみんな、しぶしぶ尻出してはみたものの、なんせ真冬のことだもんな、
「新ちゃん、先に尻、つけなよ」
「いや、たあちゃん先に川へ、はいれや」
「やだよ」
「じゃ、みんな一緒に、一、二の三で、尻つけっぺや」
って、いっせいに、キャー、キャー言いながら、川へ入って、一、二の三で、尻つけて洗ったもんだ。そうやってわいわいさわいでいるうちに、おっとやんと、おっかやんがいねえことに気がついた。
「あれ。おっとやん、おっかやん、どこさ行ったんだあ」
みんなで探した。するとな、こっそりと、上流の方へ行って木に隠れて、ピチャ、ピチャと手で尻に、水をつけているのが見えたっけ。
「あれえ、ずるいや、ずるいや」

おっとやんと、おっかやんの様子がおかしくて、みんなで大笑いしたっけな。
そうやって身を清めて、家に帰るとお皿の上には、でっかいあんころ餅がどっさり、待っていたっけ。ボンボンと燃えている、囲炉裏の火にあたり、あんころ餅をほうばること。
「うんめがったっけな」
屑米を粉にして餅をついてお供えして、川へ尻を浸して身を清め、水神様に感謝することを、川ぴたりといった。
おしまい

ひとロメモ

このユニークな風習は、旧烏山町一の沢地区で、昭和三十年頃まで、行われていました。でも、今では、この風習を知る人は、少なくなりました。